

# 琉球列島出土の刀子

上 原 静

## I . はじめに

刀子は武器や加工具などの機能を有する多様な刃物である(註1)。琉球列島の刀子は弥生～平安平行時代の5～7世紀(註2)を初現とし、韃の羽口や釘、釣針、銅銭などを伴う。また、若干遡る3～4世紀には、鉄斧や鉄滓も認められる。しかし、この段階における刀子および金属器のあり方は局所的で、漸移的である。やはり大きな変化はグスク時代からである。他方、日本本土の状況は、弥生時代から多様な種類が生産(註3)され、次の古墳時代、平安時代へと発展、類型化していく。なかでも古墳にみる副葬品では刀子が一般的で、他に工具や農具、武器、石製品(刀子形)類が加わり、被葬者の勢力関係、祭祀やその組織、さらに生産、流通、文化伝搬まで論及される。日本本土と琉球では時間軸、社会、文化内容とも大きく異なるが、階層社会の展開段階における金属器の果たす役割や関連性に注目される。本稿では琉球のまさに当該金属器の初現から展開段階にいたるグスク時代を考える上で、出度頻度が高いが未だその素性が明らかでない鉄製刀子を対象に、型式学的検討とその社会・文化的特質について言及を試みたい。

## II . 研究小史

ここでは、現段階における刀子研究の到達点を確認したい。ところが琉球列島の当該研究は、資料報告を主とする段階で、まさに緒についたばかりである。従って先ず日本本土の研究状況を概観し、後に沖縄の状況についてふれることにする。

### 1. 日本本土の刀子に関する研究

日本本土の刀子に関する考古学的研究は、昭和初期に遡る。研究の主眼は刀剣の時代鑑定で、合わせて小形刀剣(刀子)の概念化が模索された。その後、議論の対象が古墳時代や弥生時代へと遡り、型式学的、組成的な研究方法から技術史、文化史、政治史などへと多様なテーマで展開している。大きく研究領域、内容、方法などからみると、①刀子の型式学的編年と文化・歴史的研究、②刀子形の石製模造品の編年と文化的意義の研究、③民俗資料(アイヌのマキリ)の系譜や利用技法の復元的研究、④近世を中心とする工具史的研究などに分類できる。

#### ① 刀子の型式学的編年と文化・歴史的研究

初期段階には刀子の概念整理が試みられた。末永雅雄は鎌倉時代の腰刀の外装から通常の刀との区別の基準を求めた。特徴として腰刀の鞘は栗形や返角などがないものとし、それらの多くが近世以前の仕事とした(註4)。神林淳雄は末永雅雄の外装の視点をより発展させ、古墳時代の資料を対象に、

有機質、金属質、石製刀子に分類した。また、延喜式などの古文献を用い、刀子の機能が日常生活の利器であることを示した（註5）。ただし、神林の定義する刀子はあくまでも通有の刀子を取りあげたもので、蕨手刀子などには言及していない。また、辻本直男は奈良時代の刀子を刀身、拵えなどから整理し、平安時代・鎌倉時代に属する資料が皆無に近い実態を明らかにした。また、鎌倉時代末期に、刀子の再生とみられる小柄の出現について論述している（註6）。

渡辺康弘は古代刀子の拵えについて検討し、革袋鞘の存在を指摘している（註7）。刀子の類型的研究はその後各地で進められ、蕨手刀子、曲刀子、鉄柄刀子などへと細分され、議論が展開している。

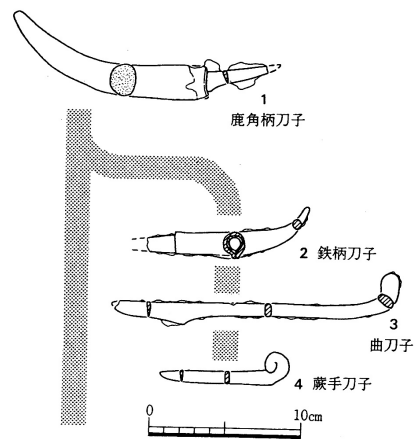
北野耕平は古墳出土の蕨手刀子について、関東から九州まで資料を長短の2種類に分け、5世紀前半に短いタイプ、後半に長いタイプが存するとし、韓国に類例があることを指摘した（註8）。また、同氏は古墳時代の蕨手刀子と通有の刀子に分け、後者が弥生時代に遡る時期から出現し、古墳時代後期においてもなお存続するのにたいし、蕨手刀子は古墳時代の5世紀前半から5世紀後半の出現を示した。さらに刀子を8～11cmを短群、17cm内外を長群として二分し、その分布が畿内と北九州に集中するとした（註9）。

曲刀子は全体に細身で、身から柄まで鉄一体に作られた刀子の一つであるが、三宅博士は山陰地方の古墳時代の資料を、区の有無の特徴から2期に分けて考えた。区の無いものから有るものへ、また、刃区で茎が幅広く短く、茎尻に向けて幅があまり変わらないタイプが主流をなし、定型化した様相をみせるとした（註10）。

松井和幸は編年を進め、曲刀子は蕨手刀子の祖形であると想定した（註11）。同様に内田律雄は曲刀子について、当該刀子は主流ではなく、その祖形は韓国に求められるという。時期は4世紀～6世紀前葉を当てた（註12）。尾上元規は松井和幸、内田律雄の曲刀子の問題を取りあげ、見解を検証し、柄の素材については木柄が主流で鹿角柄は僅少とする。朝鮮半島に比率として鹿角柄刀子の多いことを指摘し、渡来人との関わりを推定した（第1図）（註13）。

魚津知克は古墳の刀子を茎刀子と鉄柄刀子の2群に分け、茎刀子が古墳時代中期中葉に片区から両区に一斉に変化することを指摘した。また、鉄柄刀子はデザインは朝鮮半島の影響とした（註14）。鈴木一有は鉄柄刀子の一つである蕨手刀子の動向や副葬品としての象徴性について論じた（註15）。

池淵俊一は山陰地方の様相について、集落と古墳副葬とに分け、弥生時代の刀子は多用性があり、三宅の指摘した無区も存在することを述べた。また、古墳時代前から中期前では集落出土品には両区タイプ、また、茎形態にはバリエーションがある一方、副葬品刀子は刃区短小直茎タイプが殆どを占め、定型化傾向が顕著であると述べている（註16）。



曲刀子の系譜（1／4）

- 1 金海礼安里47号墳
- 2 福岡県老司古墳
- 3 岡山県斎宮2号墳
- 4 京都府宇治二子山南墳

第1図 曲刀子の系譜  
（註13文献：尾上1998年引用）

渡邊加奈子は大和地方の古墳時代の刀子について、魚津の区を観点にした分析に、刀子の全長・茎、茎の割合と、新たに茎の細長を加えて、古墳時代を三期に分けて形態変遷を概観し、製作集団の多様性を浮き彫りにしている（註17）。岡田正彦は長野における平安時代の鉄製用具の組成的研究を行い、当該時代の後期に社会構造の変革期であったことを論じている（註18）。

この様に、型式編年や系譜的な研究がなされるとともに、刀子に鎮魂・避邪の力をもつことを説いた桐原健の文化史的な検討がある。古文献を基礎に刀子が工具であり、一般日常には男女が携帯していること、身分の象徴する文房具、装身具であり、レガリアの一つでもあつたことを報告している。また、奈良時代は装身具の佩用が廃れるとし、平安時代には住居跡から多くみられることから、普遍的道具として位置づけている（註19）。

## ② 刀子形の石製模造品の編年と文化的意義の研究

刀子には軟質石材を使用し、模造した埋葬儀礼や祭場で用いられた古墳時代の祭具がある。当該製品には大正時代以来の学史があり、組成的研究、型式学的研究にもとづく編年、さらに祭祀儀礼に関する検討がなされている。この様な多様な検討のなかで、杉山晋作は、石製刀子の把と鞘の平面形態の表現から、新旧変化が捉えられるとし、型式学的変化を4期に分けて整理した（註20）。また、河野一隆は刀子、斧、鎌などの石製模造品にみる細部変化を4世紀後半から6世紀前半の4期編年で考え、その用途を、これまで①死者の持物としての副葬品、②初めは葬祭用で、後に一般の神祭用へ変化したものであり、③埋葬時の鎮魂の儀式用であるとした（註21）。

## ③ 民俗資料（マキリ）の系譜と利用技法の復元的研究

北海道における考古資料の刀子と、民俗資料のアイヌの生活活用利器（マキリ）の型式学的な比較を通して、大西秀之（註22）は身体的な技法を検討した。また、マキリを3種類に分類し、取り分けその中のⅡ類と称するマキリには柄が長く、『く』の字形に屈折した擦文文化期にまで遡るとの考えを提示した。小野哲也は（註23）は刀子とマキリが物質文化資料として系統上繋がるものと見解を述べている。

## ④ 近世を中心とする工具史的研究

渡辺晶は近世の建築用系刀子を、種類、用途、名称、形状、材質、寸法、構造、使用方法から言及している。その種類は3種で、A類刀子が操小刀、切出小刀、B類刀子が割卦引、C類が脇鉋、ヒブクラであったとする。これら建築道具は16世紀から17世紀頃に保持部分形状と装着形式に分化があり、18世紀後半頃に刃部形状に変化があったことを推定している（註24）。

以上、本土における刀子に関する研究状況を概観した。古代史の中に位置づけられる儀礼や政治論を置くとして、形態・機能論では①鹿角柄刀子、②鉄柄刀子、③曲刀子、④蕨手刀子、⑤マキリタイプ、⑥石製模造刀子、⑦異形刀子、⑧通用の刀子などがあることがわかった。また、刀子の属性に生活利

器、小武器、避邪具、文房具、化粧道具、儀仗具、工具などがあり、それらが時間の推移と社会背景の変化に伴い分化し、さらに重層化していることが窺えた。

## 2. 沖縄の刀子研究

現時点において、琉球列島の鉄製刀子をテーマにした議論はみられない。その理由として、資料の錆化と破損で本来の姿を留めるものが少ないことと、造形的な変化を捉えにくいという背景が一因しているものと思う。しかし、近年は刀剣(註25)、火矢(註26)、鎌(註27)、武器武具(註28)などの個別研究も進み、検討の時期は熟しつつある。とくに沖縄の金属製品等の再資料化(註29)や近世、近代の金工品資料の悉皆調査研究(註30)なども行われ、その全体の様相が明らかにされ、研究環境がより整いつつある。また、研究蓄積として、金属生産に関連用具と鍛冶場の探査、理化学的な接近からの小鍛冶技術(註31)、鉄素材のリサイクル性、搬入路の究明(註32)、非鉄製品の組成や生産遺構の論究(註33)などがあり、その先行研究がバックボーンにあることは論ずるまでもない。

以上、先行研究に学びつつ、関連の調査研究を整理すると、次のようになる。

まず、熊本大学考古学研究室は伊江島ナガラ東貝塚の発掘調査で出土した刀子の搬入経路を検討し、南海産貝交易によるものと想定した。双方向の資料として九州島に分布する古墳出土の南海産貝製品と刀子の状況を考察し、九州島の西海岸地域と東海岸の両地域の古墳との関係を推定している(註34)。なお、刀子の類型には言及していないが、古墳時代相当期における南海産製品に関心を有する政治勢力地域を浮かび上がらせている点で注目される。

また、これまで奄美諸島と鹿児島本土との鉄器製品をめぐる関係について、鹿児島側の研究者の川口雅之氏により、8世紀から16世紀までを、古代、中世前期、中世後期の3期に分けて鉄器の組成やその変遷について整理された(註35)。とくに奄美諸島域は9世紀段階から農具が出土せず、釣針やへら状鉄器、また鹿児島本土にはみられない刃部幅の広い刀子の存在など、鹿児島本土との差違を指摘している。

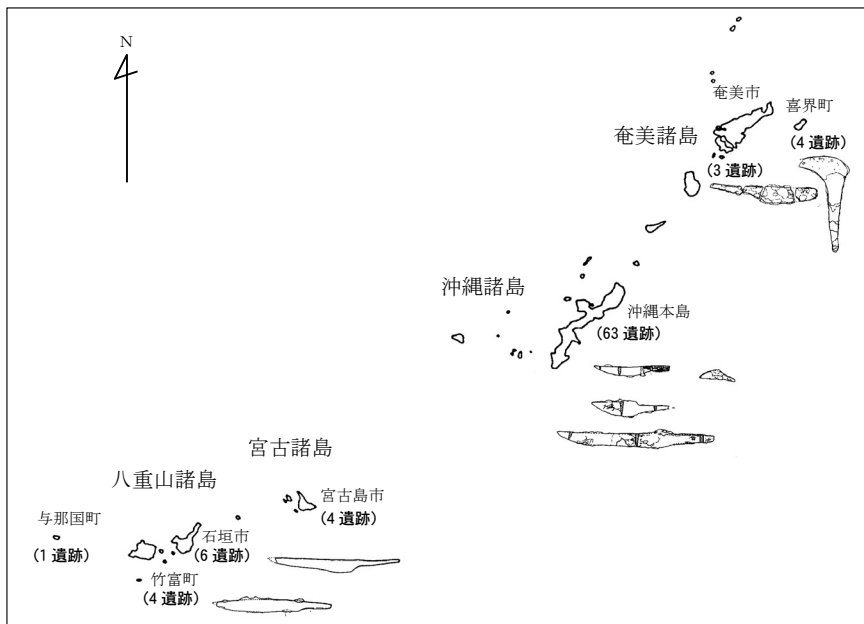
刀子の類型的な記述としては、現在のところ調査報告書でみられる。今帰仁城跡の調査報告書では、刀身の棟の反り状況に着目した分類がなされた(註36)。また、勝連城跡では、刀身の平面形態を主眼に、身幅と切っ先の形状をもとに分類されている(註37)。以上の様に沖縄諸島全体を俯瞰した類型化や意義論には至っていないのが研究の状況である。

### III. 資料分析

出土刀子資料は、地理的に北の奄美諸島から沖縄諸島、宮古・八重山諸島までの範囲を対象とし、扱う時代は先史時代後半からグスク時代までとする。

#### 1. 出土遺跡と資料の分布

出土資料は集成結果、管見で85遺跡234余点を認めた(第1表)。地域別では奄美諸島が7遺跡23点、沖縄諸島で63遺跡184点、宮古・八重山の諸島で15遺跡27点である。この状況は沖縄諸島を分布の中心とし、南北両地域に広がるように減じている(第2図)。これを新旧時間軸で分けると、先史時代後半段階では、奄美と沖縄両諸島に分布し、宮古・八重山の諸島には及んでいない。これはその



第2図 琉球列島の刀子出土遺跡分布

まま先史文化圏の相違を投影する。そしてグスク時代段階からは、沖縄諸島を中心に南の宮古・八重山諸島地域に広がる。ただし、奄美諸島は希薄地域となっている。これをどう評価すればいいのであろうか。遺跡調査が進んでいないという調査件数の多寡が反映しているのか。あるいは金属器そのものの減少を示しているのか、にわかに論じがたい。今後の検証の課題点として、現資料からはグスクにおける活動の勢いの差違を反映しているようにみられる。

出土遺跡の性格を大きくみると、貝塚、グスク、

第2表 奄美・沖縄諸島の刀子出土遺跡

貝塚	7
グスク時代前集落跡	6
グスク	27
グスク集落跡	25
生産遺跡	1
その他	4
計	70

第1表 琉球列島出土の遺跡別刀子一覧表

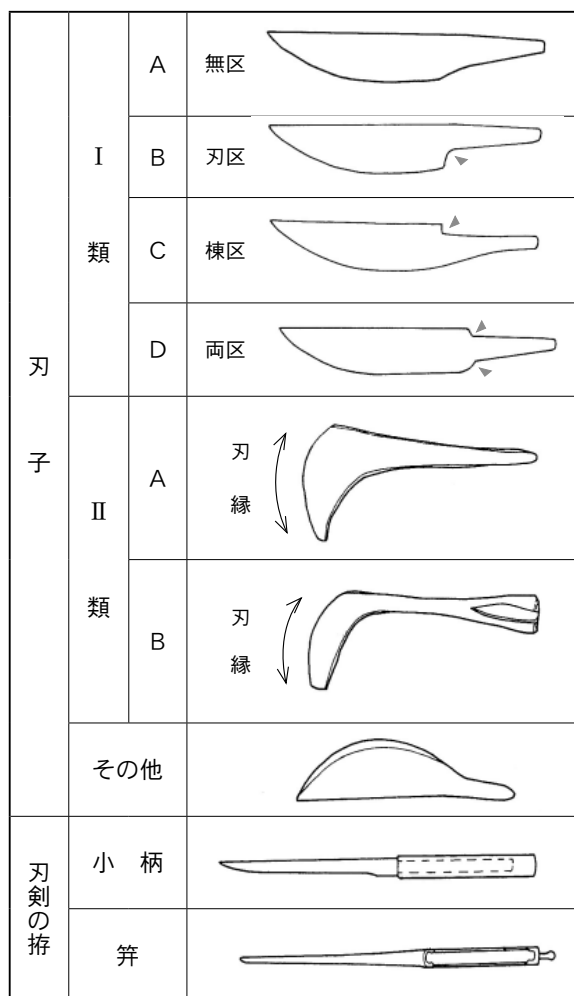
番号	地域	出土遺跡名	所在地 (市町村)	時期 (世紀)	出土 総数	I 類										II 類				備考	参考文献			
						無区			刃区			棟区			両区			不明	A			B	破片	その他
						小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大							
1	奄美諸島	マツノト遺跡	奄美市	9~10	2	2															ヤリガンナ?	1		
2		城遺跡(笠利町)	奄美市	17~19	1	1																	2	
3		小湊フワガネク遺跡	奄美市	6~7	2	1									1								3	
4		山田中西遺跡	喜界町	11後~12	3	2								1								短刀	4	
5		山田半田遺跡	喜界町	11後~12	2	1									1								5	
6		小ハネ遺跡	喜界町	11後~12	1												1						6	
7		前畑遺跡	喜界町	11後~12	12		1								6	1	3	1					7	
1	沖縄諸島	ナガラ原東貝塚	伊江村	5~7	1								1										1	
2		伊是名元島遺跡	伊是名村	12~16	1								1									鉄鏃	2	
3		根謝銘グスク	大宜味村	15・16	1										1								3	
4		瀬底グスク	本部町	15・16	1										1							拵え	4	
5		今帰仁城跡	今帰仁村	13~17	16	3	2	1				3		5	2							拵え、鉄鏃、鎧	5	
6		今帰仁ムラ跡	今帰仁村	13~16	6		2					1				3						鎧	6	
7		久志貝塚	名護市	5~7	1											1							7	
8		宇茂佐古島遺跡	名護市	16~18	1					1											1	筭	8	
9		ウェーヌアタイ遺跡	宜野座村	12~15	1						1											鉄鏃	9	
10		金武グスク	金武町	14~15	1											1						拵え	10	
11		熱田貝塚	恩納村	11~12	5	3										2						鉄鏃	11	
12		山田グスク	恩納村	14~15	13	1								3		8				1			12	
13		タシーモー北方遺跡	読谷村	11~13	1				1														13	
14		屋良グスク	嘉手納町	13~15	1	1																鉄鏃	14	
15		平敷屋トウバル遺跡	うるま市	5~7	1						1											鏢、鉄鏃	15	
16		平安座貝塚	うるま市	-	1											1							16	
17		浜中学校校庭	うるま市	7~12・15	1	1																埋葬人骨伴出	17	
18		具志川グスク	うるま市	12~15	10	1					2			1		6						刀、鉄鏃、鎧	18	
19		喜屋武マーブ遺跡	うるま市	15~16	1											1							19	
20		勝連城跡	うるま市	15~16	23	4	1					2		4	2	10				1		刀、兜、鎧	20	
21		勝連城下北貝塚	うるま市	7~12・15	1										1								21	
22		南風原古島遺跡	うるま市	12~18	1											1							22	
23		伊波城跡	うるま市	13~15	1				1														23	
24		伊波後原遺跡	うるま市	"	1											1							24	
25		比屋根遺跡	沖縄市	-	1											1							25	
26		越来グスク	沖縄市	14~15	2		1					1										刀拵え、鉄鏃	26	
27		クマヤー洞穴遺跡	北谷町	15・16	1											1						拵え	27	
28		後兼久原遺跡	北谷町	12~15	14	1							1			12						鉄鏃	28	
29		北谷グスク	北谷町	13~15	2	1								1									29	
30		伊礼原E遺跡	北谷町	約16	1									1									30	
31		伊礼原D遺跡	北谷町	15~16	1											1							31	
32		中城城跡	中城村	14~15	1											1						鏢、鉄鏃	32	
33		新垣グスク	中城村	15~17	1	1																刀、鏃、鎧	33	
34		真志喜富盛原第二遺跡	宜野湾市	12~18	1	1																鉄剣	34	
35		喜友名山川原第6遺跡	宜野湾市	13~14	2				1							1						鎧	35	
36		宜野湾クシヌウタキ	宜野湾市	15・16	1											1						鉄鏃	36	
37		大山前門原第一遺跡	宜野湾市	15~18	1											1							37	
38		真久原遺跡	浦添市	13~14	1											1							38	
39		浦添城跡	浦添市	13~17	1									1								刀、兜、鎧	39	
40		拜山遺跡	浦添市	13~14	1											1						鉄鏃	40	



## 2. 刀子の類型

前項でみた分布上の特徴が、刀子の類型と連関するところがあるのか、また、琉球列島の刀子の型式学的特質について検討した。

まず、琉球列島出土の刀子は2種類に大別できる。ただし、当2種類に納まらない刀子も存在するが、現時点では僅少のため「その他」に入れた。便宜的に第3図に模式図を掲載したが、分類対象外の類似する刃物も認められることから、参考に筭と小柄も付記する。

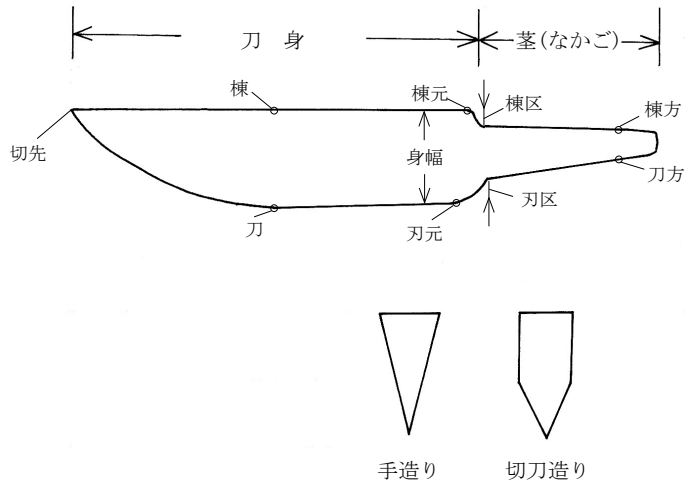


第3図 刀子と類似製品の模式図

I類：通用のナイフ形をした刀子で、刀身と茎がほぼ直線になり、刃部が外湾して切っ先を作るもの。刀身や茎の形、長さ、幅、区など各部を取り上げると多様である。これについては、形態や製作技術、分布上の特徴を検討するため、頁を別にして検討した。

II類：前記I類とは全く異なるフック状を呈した刀子である。注目点は刃部の位置が外湾側に付き





第4図 刀子の各部名称

れ、内湾側が棟を形成するところである。刀身部と茎の成形形態から2種に細分される。

Ⅱ a 種 ... 着装の茎が刀身と一体の一枚を形成するもの。

Ⅱ b 種 ... 着装部位がソケット状にホゾ孔(筒)を作るもの。

その他：上記Ⅰ類を逆さまにした形で、棟が山状に湾曲し、刃部が水平方向にある刀子である。現時点では一点のみの報告で、今後の増加如何により、新たな類型を作るか検討したい。

現在琉球列島出土の刀子は、総数 218 点である。その内訳はⅠ類が 211 点 (97%)、Ⅱ類が 6 点 (3%) で、Ⅰ類が極めて一般的な形態をなす刀子といえる。やはりⅡ類は特殊な扱いになる。Ⅰ類は各部位ごとにみると、多様性があり、それらを類型化することにより、その系譜や時代性、地理的特性が窺える (第3表)。

第3表 類型の集計

種類	分類可	不明破片	計
Ⅰ類	110	101	211
Ⅱ類	5	1	6
その他	1		1
計	116	102	218

### 2-1. Ⅰ類刀子の分類

Ⅰ類刀子は基本的に、鏢をもたない小形の刃物で、刀身と茎からなる製品である (第4図)。刀子の分類は魚津知克 (註38)、池淵俊一 (註39) らに学び、刀身と茎との境になる区 (関) にまず着目した。大きなポイントは、刃部は当然ながら利用度が高く、研ぎ直しなどにより、経年による変化が最も生じやすい部分である。その点では区は本来の形態を留めおいている可能性が高い箇所である理由から

である。なお、分析では①区（関）の有無と形態の他に、②茎の形態、③刀身の平面形態、④刀身の長さ、⑤刀身の幅、⑥刀身の厚み、⑦刀身の上面観などからも分析を試みた（第5図）。

① <sup>まち</sup>区：刀身部と茎にある区と茎の形態のあり方で、以下に4種に区分する。

A類 刀身の棟から茎まで区がなく、刃区もないものの（無区）

B類 棟部は無区で、刃部側に区を有するもの（刃区のみ）。

C類 棟部に区をつくり、刃部側には区がみられないもの（棟区のみ）。

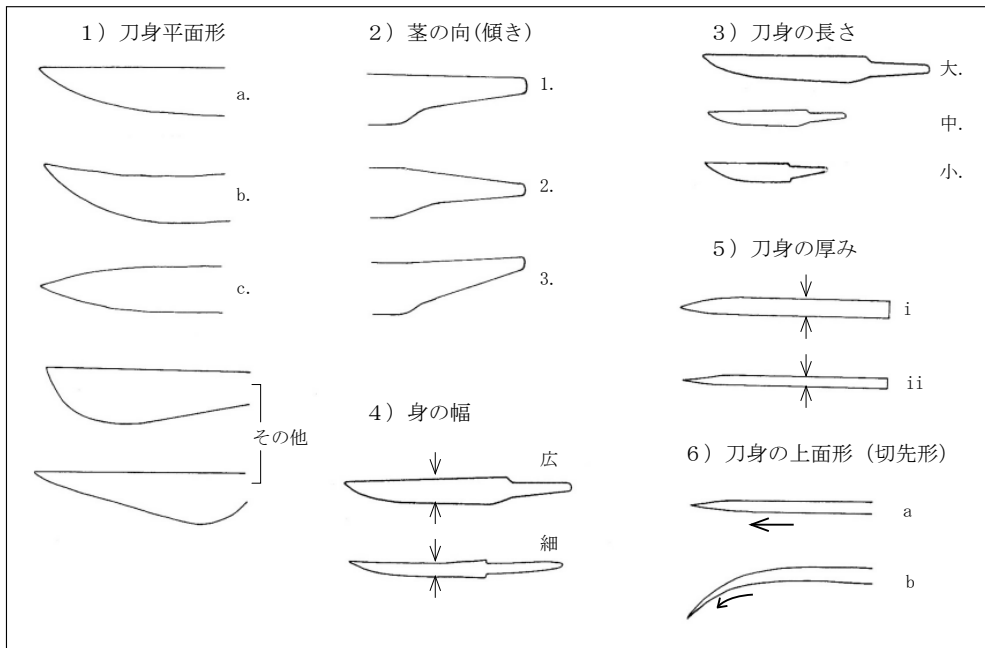
D類 棟部および刃部の両側に区を形成するもの（両区）

A類は第6図1～7、15 B類は同図8～14、16 C類は第7図6、7、15 D類は同図1～5、8～14 その他16である。

分類結果、A類が53点、B類が16点、C類が14点、D類が41点という状況にあった（第4表）。

第4表 I類の区分類

無区	40
刃区	16
棟区	14
両区	40
破片	101
計	211



第5図 分類の基準属性模式図（1～6）

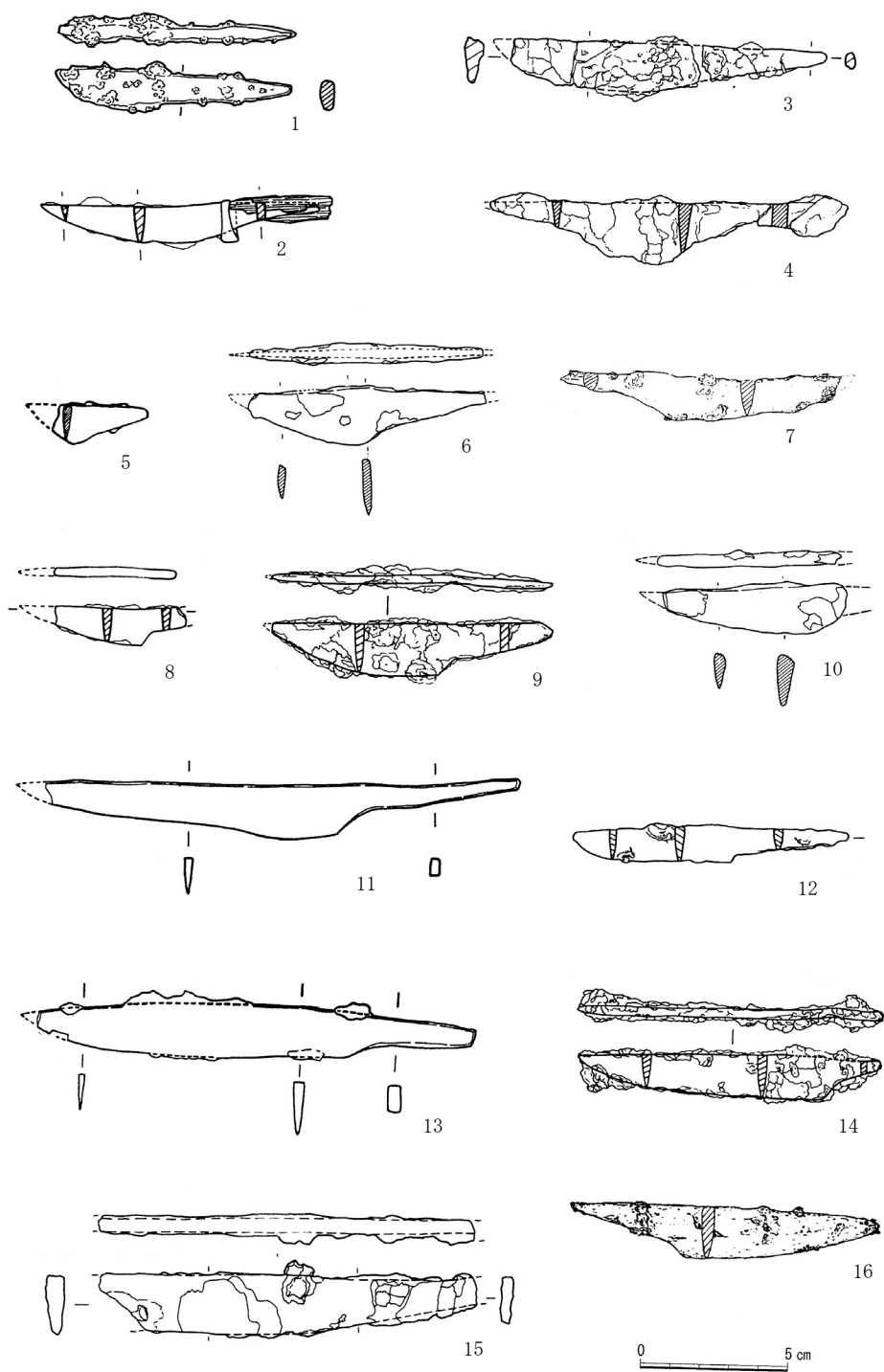
② 茎の方向：茎の向きを意図して3種類に分類する。

1類. 茎が直線的なもの

2類. 茎がへりの字に下方へ屈曲するもの。

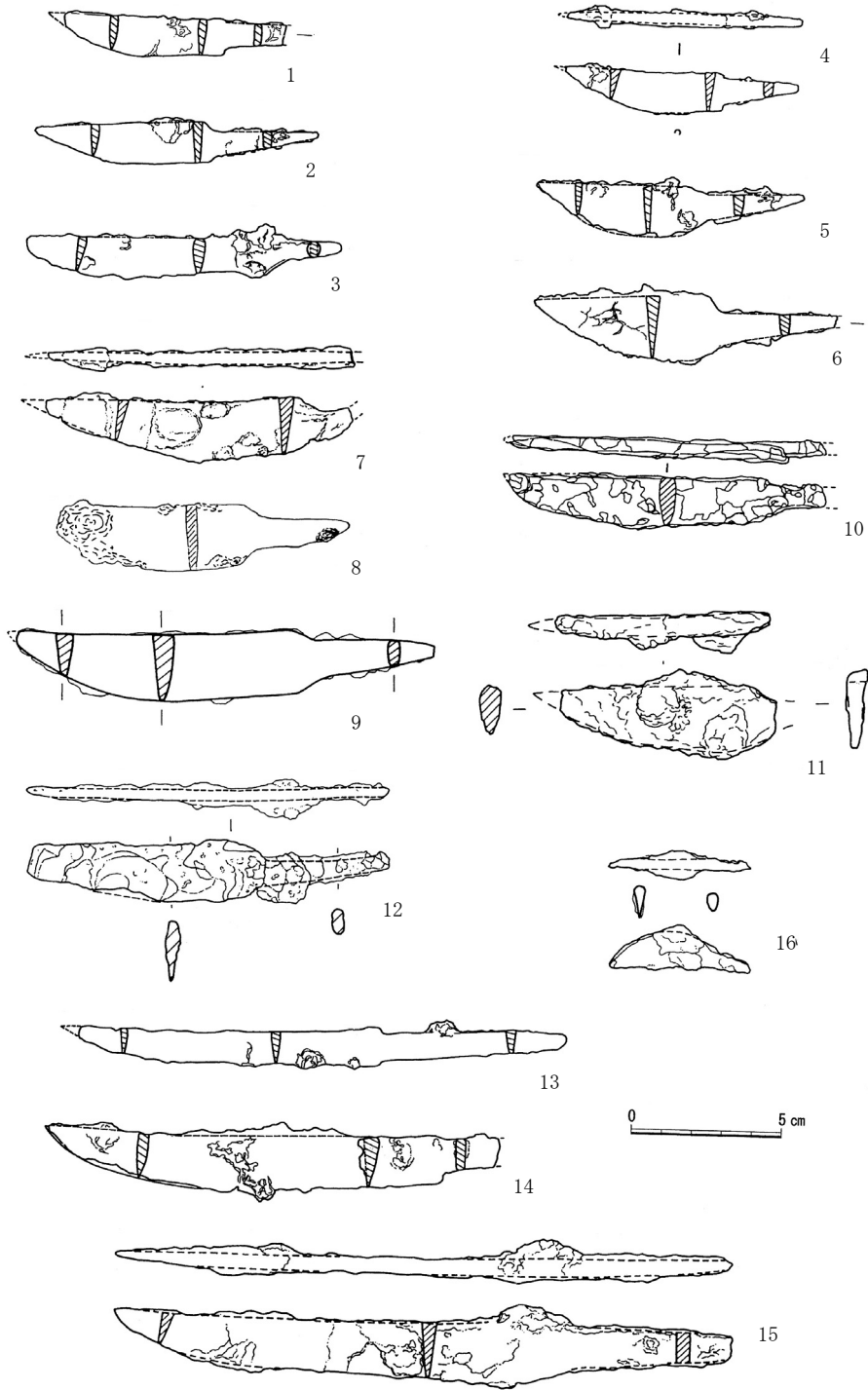
3類. 茎棟側方向く字状に屈曲するもの。

以上の3種類に分けたところ、1類が98点、2類が11点、3類12点を数えた（第5表）。



第6図 I類刀子 A類(無区) 1~17.15 B類8~14.16

- 1.タシー毛遺跡 2.12.今帰仁城跡 3.屋良グスク 4.浜中学校庭出土 5.宮平グスク 6.10.糸数グスク  
 7.伊波後原遺跡 8.稲福遺跡 9.14.我謝遺跡 11.成屋遺跡 13.仲筋貝塚 15.越來グスク 16.伊波グスク



第7図 I類 C類(棟区) 6.7.15 D類(両区) 1~5.8~14 その他 16

1~7.13~15.今帰仁城跡 8.大城グスク 9.勝連城跡 10.浦添城跡 11.ウェーヌアタイ遺跡  
12.クニンドー遺跡 16.山田グスク





3種類の分類結果、a類. 92点、b類. 21点、c類. 4点となった（第6表）。

第6表 I類刀子の区と柄、刀身の形

茎部 刀身部	直線形			傾斜形			曲斜形			計
	a	b	c	a	b	c	a	b	c	
無区	32	51	1	5		1	2		1	93
刃区	11	1		4						16
棟区	8	4		1						13
両区	31	11	2							44
計	82	67	3	10	0	1	2	0	1	166

④ 刀子の長さ：刀子の大小から、任意に3種類に分けた。

刀身の平面形態と同様に、長さや幅については、経年変化が予想されるが、おおよその傾向を把握することが可能であることから、接近を試みた。出土資料の状況から、長さが1尺、5寸、3寸の3タイプなどの属性に分けられる。

小型. 長さが3寸（9.1 cm）を基本としてその前後、6～12 cmとする。

中型. 長さが5寸（15.2 cm）を基本としてその前後、12～18 cmとする。

大型. 長さが一尺（30.3 cm）を基本として、18 cm以上とする。

およそ長さが見出しうる資料から、小型が90点、中型が27点、大型が7点という状況になった（第7表）。

第7表 I類の区と大きさ

サイズ	小型	中型	大型	計
無区	43	7	3	53
刃区	11	3	2	16
棟区	11	3	0	14
両区	25	14	2	41
計	90	27	7	124

⑤ 刀身の幅（区幅）

刀身部の身幅の広狭に注目し、刀身の長さに対する幅が5分の1以下を細タイプ、4分の1以上を広タイプとしてみた（第8表）。

第8表 I類の平面形と、大きさ、幅

サイズ 身幅	小型		中型		大型		計
	広	細	広	細	広	細	
a. 直線形	16	67	2	23		7	115
b. 外反形	1	7		4			12
c. 剣先形		2					2
計	17	76	2	27	0	7	129

## ⑥ 刀身の厚み

厚みはその長さに関係し、その用途が決定しているものと推測される。この点を属性の一つとして、i類：0.3 cm以上と、ii類：0.2 cm以下に大別し分類も試みたが、多くが錆化のため当初の厚みを保証できるものではない。X線画像からの科学性が問われていることから統計的な資料化は今回控えた。少なくとも肉眼観察では、0.2 cm以下は少なく、大半が0.3 cm以上のものが多い印象報告で留めておきたい。

## ⑦ 刀身の上面形

基本的には刀身と茎が同じ平面にあるのか、あるいは、湾曲するものに分けられる。後者は僅かながらみられ、ヤリガンナ的な使用が推測される。ここにおいても、その大多数が刀身が切っ先から茎まで直線をなすものである。

## ⑧ 茎の長さ

刀身に対する茎の長さの比は3分1以上、2分の1内外を示すもので、3分1以下をなす短いものは極めて僅少である。古墳時代の副葬を目的に製作された種類とは異なる。

以上、8カ所の属性から分類し、また類型化した集計結果を以下に示し、考察を進めたい。

# III. 類型の分析

## 1. 刀子の分布

先にもふれたが、琉球列島における刀子の出土総数は218余点である。奄美、沖縄、宮古・八重山諸島の3諸島別にみると、奄美諸島が11% (23点)、沖縄諸島が77% (168点)、宮古・八重山諸島が12% (27点) となり、沖縄諸島が最も多く、南北の島嶼に移り減じている。時代別では、弥生～平安並行時代後半(後Ⅳ期)は、全体に出土遺跡数は僅少で、奄美諸島や沖縄諸島に散在する。いずれも拠点的な出土様相を呈する。次代のグスク時代は、遺跡数と出土枚数は沖縄諸島を中心に、新しく宮古・八重山諸島が加わる。また、この時代にみる奄美諸島は出土地としては極めて希薄な状況を呈する。この数量差は当然ながら遺跡調査の多寡でも変化するもので、今後の議論の余地が残るが、現時点におけるデータに基づくならば島嶼間の鉄器類の保有差として認識される。

## 2. 系譜

琉球列島の刀子の種類は2種に分類された。Ⅰ類は通用のナイフ形で、Ⅱ類はいわゆる削刀子である。両者ともに先史時代後半代にはみられ、Ⅰ類はグスク時代以降も連続する。Ⅱ類は現時点でグスク時代(12世紀以降)では報告がない。これら島嶼における初期段階に刀子は、北の九州社会に系譜が求められよう。ことにⅡ類については、同類型は見出していないが、第7図4、5に示す熊本県つつじヶ丘横穴古墳群C-1号(註40)出土の鏃(飛燕形)に類似性が指摘できる。当該製品は外縁



が半円状ではあるが、その付刃の形態や半弧を成す点では、本Ⅱ類の付刃形態に近い。また、同図6は北九州市長野A遺跡(註41)で出土した削刀子(註42)で、刀身部と茎との境が「く」字状に曲がり刃が外縁に付く形態ではやはりⅡ類に近く、当該製品が古代から中世まで連続して存在する利器といえる。従ってこれら日本本土の技術の背景をもとに南島で生産されたものと考えられる。現時点でⅡ類刀子と同形態のものを見出し得ず、あるいは南島独自の変容も考慮される。

### 3. 類型の特徴と推移

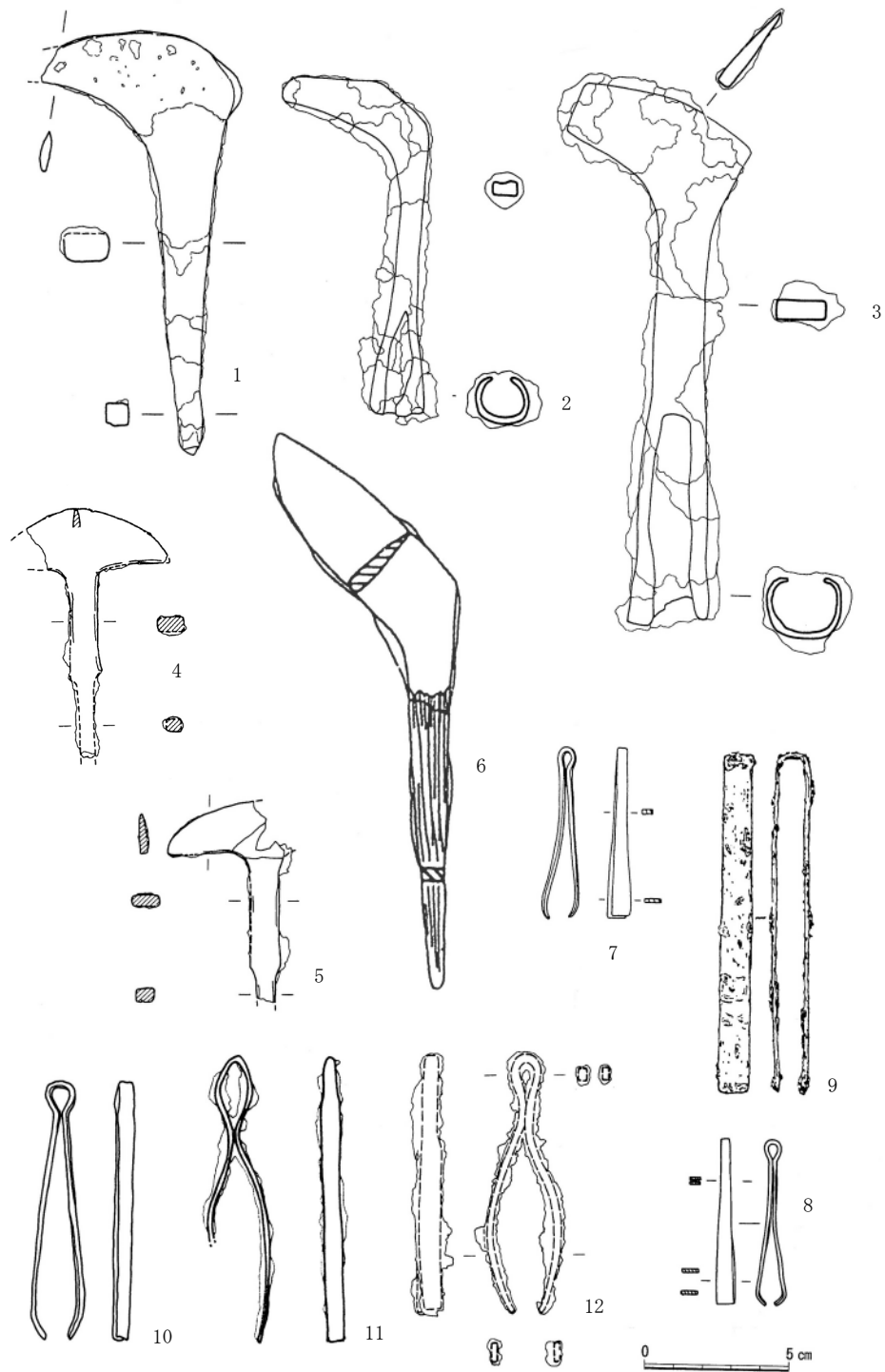
前後したがⅡ類刀子に比べⅠ類刀子は97%の出土量を占める。多様な形態をなすが、区を基準に分析した結果、量的には無区と両区が多く、残る刃区と棟区が4～3割の状況で分けている。これらを時間軸からみると、弥生時代から古墳時代に両区が認められる。その後の古墳時代末から平安時代段階には、奄美、沖縄地域には無区が多くなる傾向がある。大きさや平面形態、製作のあり方から、舶載品としての可能性は低いものである。つまり島嶼産で、ある意味で当該列島では古式の刀子形態として捉えられよう。グスク時代に降ると、区にみる類型も4種類総てが出揃い多様な展開をみせる。このことから島嶼の刀子の類型は無区→両区という前後関係で理解される。しかし、僅かな時間の間に物流が活発化段階に入ることから、舶載品、島嶼産品が併存する状況が実態をなすものと思われる。今後の理化学的な検討を加える必要がある。

刀子の出土量は中核的グスクに傾向として多く、また、その種類も多様なものを獲得している。この段階において、宮古・八重山諸島が刀子の分布圏に入る。注目すべきはここにおいては無区が多い傾向がみられる。いわゆる古式の刀子である。形態上で無区は柄と茎が一体的なもので、細かな細工を加えないという点では、製作技術面や作業コスト面でも有区に比較し、割安になるという背景を窺うことができる。

刀子の属性分析として、形を大きく印象付ける刀身の平面形態を検討した。これは、a、棟の直線形が89%、b、棟が外反形9%、c、剣先形2%という3つの分類結果を得た。直線形が主流をなす中で、棟に外反をみせるタイプは概して沖縄諸島の中核的グスクにあり、多様な刀子を所持し得ることを示唆している。さらに、刀身の印象をわける刀身の幅についても検討した。結果、小型の中で幅広19%、細身81%となり、中型では幅広7%、細身93%と刀身が長くなるにつれ、圧倒的に細身になる傾向を有する。

刀子の大きさは、72%が小型で占める。残る中型が22%、大型が6%と続く。まさに刀子が三寸を中心に偏在し、その形状のバリエーションも特徴の一つである。刀子の保有量と種類の多さは中核的グスクにある。なお、宮古・八重山諸島については、若干差異が認められ、出土量そのものは僅少なながらも、大きさをバリエーションを有している地域である。この点を理解するとするならば、当該地域の亜熱帯環境に適応した、伝統的な山刀の存在があり、その利器の萌芽がグスク時代にあることを示唆している。

これら類型に関する文化的影響に関して、無論直接ではないものの、中世段階のフィルターを通し



第8図 II類刀子1～3・II類刀子類例製品4～6 毛抜き形製品7・8・10～12 毛抜き9

1～3.前畑遺跡 4.5.つつじヶ丘横穴古墳(熊本県) 6.長野A遺跡Ⅲ区1号土墳墓 7.宇茂佐古島遺跡  
 8.今婦仁城跡 9.ヒニグスク 10.山田グスク 11.小正西古墳(福岡県) 12.島内地下式横穴群(宮崎県)

てのことであるが、古墳時代における刀子文化との繋がりも検討した。とくに曲刀子や蕨手刀子、マキリなどとの関係を注目してのことである。その点から茎の形態に着目し、直線形、斜め形、曲がり形の3種類に分けてみた。その結果、88%が直線形で、僅かに傾斜形が9%、曲斜形が3%という比率でみられる。しかし、後者の傾斜形や曲斜形は、古墳時代にみられるタイプと比較するといずれも微細なもので、直線形のバリエーションとして捉えられ、古墳文化との関連性はみられない。

#### IV. 刀子の拵えと佩帯

刀子の拵え（外装）やその佩帯について、琉球列島の状況を考えてみたい。

##### 1. 拵え

刀子の拵え（構造形態）を考える上で、大いに参考になるのが伝製品である。しかし、島嶼性と亜熱帯、石灰岩土壌という環境は金属や有機質資料の保存条件として最悪で、また、第2次世界大戦における金属類の供出、徹底的な地上戦などの破壊も重なり、今日沖縄でその姿を留めるものは殆どみられないのが現状である。拵えに関しては日本本土や中国、韓国製品などとの援用をはかつていかなければならない。以下に関連するものから接近する。

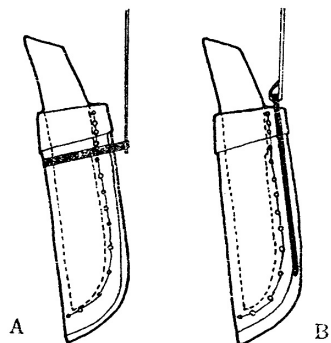
##### 1-1. 柄と鞘

拵えとともに、刀子の柄や鞘に関して、形ある資料そのものではないが、素材の一部が付着物として確認される事例がある。勝連城跡（註43）、大里城跡（註44）の出土資料では、木質物が観察されている。また、柄の区部分には把縁金具の存在も認められている。以上、現時点では木質製の柄や鞘が推測できるが、日本本土では角質柄や鉄製柄、また、朝鮮半島では竹、角、珠瑠、琥珀、さらに絹の縫糸で房を付けたものなどがあり、多様な種類の存在も考慮せねばならない。

##### 1-2. 関連金具

この拵えに関連し注目されるのが毛抜き形金具である（第8図7～11）。宍戸信悟による指摘で、同金具が刀子の鞘を腰に懸垂するための挟む道具の可能性を説く。当該製品は古墳時代から平安時代の5世紀～11世紀前半に流行し、3類5種からなる（註45）。この研究は引き継がれ、渡辺康弘は奈良時代の伝製品資料を根拠にして、毛抜き形金具が具体的に吊り下げのためのつまみ部と、器物を挟むU字形板の機能を上げ、木鞘や皮袋鞘の縁金具に属するものとした。当該金具の着装状況（2種類）を復元提示している（第9図）。また、当該資料の分布は北海道から九州までみられる（註46）とする。

琉球列島にもこの種の資料がみられる。類例として九州の福岡県小正西古墳（第8図11）（註47）と、宮崎県島内地下式横穴墓群（同図12）（註48）の出土資料を提示する。琉球列島で



第9図 刀子佩復元図  
（註45文献：宍戸1984年引用）

は山田グスク（同図 10）（註 49）、宇茂佐古島遺跡（同図 7）（註 50）、今帰仁城跡（同図 8）（註 51）、ヒニグスク（同図 9）（註 52）、登野城遺跡（註 53）などから出土している。琉球列島の資料では 2 種類に大別できる。A 類は先に挙げた折り曲げ部分が環状部をつくるタイプで、大小の大きさが 2 タイプに細分される。B 類は細い板材を中央で曲げた形をしたもので、通有の毛抜きで、いわゆる曲がり部分に輪を作らないタイプである。今後 A 類と刀子の遺跡における共伴関係に留意したい。

## 2. 刀子の佩帯

刀子の佩帯はうるま市勝連浜中学校庭の工事現場で不慮発見された一体の埋葬人骨から推定される。刀子は屈葬人骨の左腰部で検出されている。出土位置から右利きの人物が推量される。人骨の所属時代については隣接する先史時代の貝塚との関連が推測されている（註 54）。他に埋葬事例はみられず、僅かに副葬品例として奄美喜界町山田中西遺跡において報告されている。人骨は風化し土壌内出土であるが、身体の位置関係は確定できない（註 55）。次に状況証拠的に用途と機能の関連と同包含層内という観点から、グスク時代に多く出土する提砥の存在が注目される。セット関係から佩帯を想定させる。仮に携帯が一般的であるならば、個人に帰属する小道具としての傾向が高く注目される。なお提砥の検出例も同時代に多くみられるが、副葬事例は報告されていない。この副葬という文化を考える上で、一つに調査による発見事例が少ないという、あくまでも調査方法（地点）に課題を見る点と、今一つは金属鉱物資源の乏しい島嶼における貴重性が反映し、埋納までには至らなかったという社会的な背景を考える点がある。グスク時代における埋葬で、死者に対する権威付化に向ける物資が乏しく、その使用は現実的な社会が優先されていたのではなかろうか。現世のグスクを中心とし関係者の権威付けの優先性が反映しているようにも推察される。ここに島嶼の社会、経済的な一側面が現れているように思われるのである。

## V. まとめ

以上、先史時代後期～グスク時代における琉球列島出土の刀子を類型化し、地理的分布と時間軸にみる推移について考察した。また、文化的側面に言及した。改めて私見を加えて以下にまとめてみたい。

1. 琉球列島における刀子の登場は弥生～平安平行時代の後期（5-7 世紀）で、同時代の後期末（8-11 世紀）からは生産を行っている。ことに顕著な増加はグスク時代の後半（14-16 世紀）で、分布も沖縄諸島を中心に宮古・八重山諸島にまで拡大する。ただし、逆に奄美諸島は希薄な地域となっている。
2. 沖縄本島では北、中、南部の 3 地域において、中部が最も多く出土している。また、地域内では中核的グスクを中心に拠点的分布をなす特徴が認められる。
3. 出土遺跡の性格は貝塚、グスク、集落、生産遺跡、その他からなる。その中でグスクと集落跡での出土が多い。取り分け注目されるのは、明確な武器、武具の出土はみられないグスクにおいても刀子は存在し、同様に集落においても分布している。いずれもその幅広い共通する機能性を示

している。ただし、日本古代の律令体制以降にみられる文具的な性格については、やはり硯（註56）や印章（花押）などの伴出を根拠にするならば、グスク時代からである。ただし出土は限定的であり、鮮明になるのは以降の王府時代になる。

4. 出土刀子はⅠ類とした通用の刀子と、Ⅱ類の削刀子の2種類に区分される。Ⅰ類は先史時代末以降連綿と存在するナイフ形の刀子である。一方、Ⅱ類は後期末（8-11世紀）にみられる刀子で、現時点で出土が局所的で、その後の普及が明確でない。今後の出土を見守りたい。
5. 類型化の結果、出現時期の弥生～平安平行期後期（5-7世紀）には両区刀子が存する。その造形と弥生土器、その他の遺物のセット状況から舶載されたものとみられる。同時代末段階（8-11世紀）になると、無区か区の造り出しが弱いタイプで短小、身幅のある形態が登場する。琉球の刀子は小型の3寸（9.1cm）以下のものが72%と最も多い。九州では短小でも細身が多い点を勘案すると、寧ろ南島産の形態は、無区タイプを初期段階として、後に鮮明な区を加えていくものと思われる。また、刀身の形状変化として、刀身の棟が直線をなす直刀タイプから棟が外反るタイプへとバリエーションを広げる傾向がある。要するに、この変化は簡単な一枚形から、細かな細工が加わり、多様化する製作技術上の変化の方向性としてみてとれまいか。
6. Ⅰ、Ⅱ類刀子ともその系譜は九州に求めることができる。ただ、弥生～鎌倉時代並行段階においても、Ⅰ類刀子は通用の類型のみで、ことに古墳時代に顕在化する金属柄刀子や曲刀子、蕨手刀子などとの関連を示すものは認められない。他方、Ⅱ類は古墳時代報告の飛燕形の鎌や、古墳～中世以降に報告される削刀子に類似性を求めうる。いずれも刃付や形態、さらに、茎の袋形態（キャップ式）に通底する技法が認められる。よってⅠ、Ⅱ類刀子ともに、古代またそれ以降中世に続く製作技術が背景にあり、さらに、南島での生産による変容も推測される。
7. 刀子を含めて副葬習俗は一部地域を除き南島社会では一般的ではない。勿論経年による腐食、消失も考慮されるが、島嶼における金属の貴重性、高価性を反映しているものと考えられる。なお、一部と断ったのは奄美諸島の喜界町山田中西遺跡や山田ハンタ遺跡などの城久遺跡群では刀子や金属製品の検出例が認められる。ただし、これら遺跡の遺物組成は九州本土系であり、現時点では一般化はできないことによる。
8. 刀子は関連する道具の提砥や毛抜き形金属製品などがあり、一つの組み合わせ具の存在がみえてきた。副葬事例は僅かではあるが、佩帯していたことが推測される。また、一方で佩帯者の性別や年齢の関わりが気になってくる。関連して南島には多様な勾玉や玉類の出土が多数あり、モノを佩帯し表象する文化が存在する。当該時代の服飾と本質的な社会構造に繋がる一つの課題が見えてきた。
9. 刀子の機能・用途は、第9表に示すように時間軸により性格が付加、強調されているように考えられる。初現段階は貴重な生活利器として性格がみられる。時代を降りるにつれその増加と広がりがあり、グスクや社会的な特権的な者との関わりが窺えるようになる。武器として中・大型も加わり、グスク時代後半段階に増加する戦闘具類との共伴関係が認められる。また、工具として



## 参考引用文献

- 註 1 a. 大城 慧「刀子」『沖縄タイムス大百科事典』1983 年  
b. 齊藤忠「刀子」『日本考古学用語辞典』1998 年 学生社  
c. 小野正敏・佐藤信・館野和己・田辺征夫『歴史考古学大辞典』2007 年 吉川弘文館
- 註 2. 熊本大学「伊江島ナガラ原東貝塚 7」『考古学研究質報告』第 46 集 2011 年
- 註 3 a. 野島永「弥生時代後期から古墳時代初頭における鉄製武器をめぐる」『河瀬正利先生退官記念論文集 考古論集』2004 年  
b. 野島永「弥生・古墳時代における鉄器文化」『東アジアにおける鉄文化の起源と伝播に関する国際シンポジウム』第 1 回東アジア鉄文化研究会 2007 年
- 註 4. 末永雅雄「経塚出土腰刀の一形式について」『考古学雑誌』第 21 巻第 10 号 1931 年
- 註 5. 神林淳雄「刀子について」『人類学雑誌』第 54 巻 第 7 号 1939 年
- 註 6. 辻本直男「刀子考」『古代学論叢』末永先生古希記念会 1967 年
- 註 7. 渡辺康弘「古代刀子の拵えについて」『史観』第 115 冊 1986 年
- 註 8. 北野耕平「蕨手刀子の年代」『古代学研究』第 23 号 学生考古学研究会 [編] 1960 年
- 註 9. 北野耕平「古墳時代中期における鉄器の二相—古市古墳群出土遺物を中心として—」『三上次男博士喜寿記念論文集』三上次男博士喜寿記念論文集編集委員会編 1985 年
- 註 10. 三宅博士「山陰地方出土刀子に関する覚書き」東森市良ほか編『山陰考古学の諸問題—山本清先生喜寿記念論集—』山本清先生喜寿記念論集刊行会 1986 年
- 註 11. 松井和幸「日本と朝鮮半島の鉄と鉄製品」『季刊考古学』第 33 号 1990 年
- 註 12. 内田律雄「いわゆる異形刀子について」『新開古墳群』隠岐島前教育委員会 1990 年
- 註 13. 尾上元規「曲刀子の系譜と性格—岡山県内出土資料を中心に—」『古代吉備』第 20 集 / 古代吉備研究会 1998 年
- 註 14. 魚津知克「鉄製農耕具の副葬と農耕具形石製祭器の副葬」『古代』第 118 号 2005 年
- 註 15. 鈴木一有「蕨手刀子の盛衰」大阪大学考古学研究室編『待兼山考古学論集』—都出比呂志先生退任喜念— 大阪大学考古学友の会 2005 年
- 註 16. 池淵俊一「山陰における古墳時代前半期鉄器の様相—集落出土資料を中心に—」野島永ほか編『考古学論集—川越哲志先生退官喜念論集—』川越哲志先生退官喜念事業会 2005 年
- 註 17. 渡辺加奈子「畿内におけ古墳時代の刀子—大和地方を中心に—」『古代学研究』2010 年
- 註 18. 岡田正彦「平安時代の鉄製用具と小鍛冶遺構小考」『長野県考古学会創立 20 周年記念：大澤和夫会長喜寿記念論文集』長野県考古学会 1982 年
- 註 19. 桐原 健「刀子の持つ鎮魂・避邪的な性格」『古代文化』第 46 巻第 10 号 1984 年
- 註 20. 杉山晋作「石製刀子とその使途」『古代の祭祀と信仰』本編 国立歴史民俗博物館 1985 年
- 註 21. 河野一隆「石製模造品の編年と儀礼の展開（特集 古墳時代中期の諸様相）」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』11 巻 帝京大学山梨文化財研究所 [編] 2003 年

- 註 22. 大西秀之「柄の記憶－木工におけるアイヌの人々の身体技法の歴史－」民具マンスリー 日本常民文化研究所 [編] 1968 年
- 註 23 a. 小野哲也「刀子からマキリへ 考古学的アプローチによる」『北大史学』(40) 頁 1～2 2001 年  
 b. 福田智子「北海道における刀子の形態的変遷」『金大考古』44 号 2004 年
- 註 24. 渡辺 晶「近世の建築用刀子系道具について 伝製品をはじめとした関連資料の調査報告」その 7『研究紀要』通号 9 頁 1～49 竹中大工道具館 1997 年 6 月
- 註 25. 佐原 真「沖縄のよろいと刀」『新版古代の日本・月報 2 第 3 巻付録』角川出版 1991 年
- 註 26. 當眞嗣一「火矢について」『南島考古』第 14 号沖縄考古学会 1994 年
- 註 27. 上原 静・宮城綾乃「南島考古資料録 (2) グスク時代の出土の鉄鏃と骨鏃」『廣友会誌』第 3 号 廣友会 2007 年
- 註 28 a. 与儀憲達「グスク時代の武器・武具について」『考古学ジャーナル』JN0.397 ニューサイエンス社 1995 年  
 b. 上里隆史「琉球の火器について」『沖縄文化』36－1 2000 年  
 c. 上原 静「武器・武具の様相」『沖縄県史各論編第二巻考古』沖縄県教育委員会 2003 年  
 d. 山本正昭・上里隆史「首里グスク出土の武具資料の一考察」『沖縄埋文研究』2 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 年
- 註 29. 當眞嗣一「沖縄の鉄器」『考古学資料より見た沖縄の鉄器文化』沖縄県立博物館 1997 年
- 註 30. 沖縄県教育委員会『沖縄の金工品関係資料調査報告書』2008 年
- 註 31. 大城 慧「沖縄における鉄関連遺跡と鉄器資料について－グスク遺跡出土の資料を中心として－」『南島考古』No. 8 沖縄考古学会 1983 年
- 註 32. 大城 慧『沖縄グスク時代における鉄器について』第 45 号 たたら研究会 2006 年
- 註 33 a. 大城 慧「沖縄の鉄－グスク時代出土の資料を中心として」『琉大史学』第 16 号 琉球大学史学会 1989 年  
 b. 大城 慧「沖縄の鉄とその特質」『考古学ジャーナル』No320 ニューサイエンス社 1990 年
- 註 34. 註 2 掲載文献に同じ。
- 註 35. 川口雅之「鹿児島県における古代・中世鉄器の基礎的研究」『地域・文化の考古学』下條信行先生退任記念論文集 2008 年
- 註 36. 今帰仁村教育委員会『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』2008 年
- 註 37. 勝連町教育委員会『勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査 (2)』1991 年
- 註 38. 註 14 掲載文献に同じ。
- 註 39. 註 16 掲載文献に同じ。
- 註 40. 熊本市教育委員会『熊本県つつじヶ丘横穴古墳群－発掘調査報告書－』2002 年
- 註 41. 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 (編)『長野 A 遺跡 3: III・VII・VIII 区 (1 号) の調査』1987 年



- 註 42 a. 宮 宏明「資料 中・近世と古墳時代の特殊な刀子」『人類史研究』10 1998 年  
 b. 京都府教育委員会『京都府文化財調査報告』1955 年  
 c. 隠岐島前教育委員会『新開古墳群』1990 年
- 註 43. 註 37 掲載文献に同じ。
- 註 44. 大里村教育委員会『大里城跡』都市公園計画に係わる緊急発掘調査報告書(1) 1998 年
- 註 45. 宍戸信悟「厚木市上依知 1 号墳出土の毛抜き形鉄器について」『神奈川考古』第 19 号 神奈川県考古同人会 1984 年
- 註 46. 註 7 掲載文献に同じ。
- 註 47. 福岡県穂波町教育委員会『小正西古墳』穂波町文化財調査報告書第 12 集 2000 年
- 註 48. 宮崎県えびの市教育委員会『島内地下式横穴墓群Ⅲ・岡基遺跡』2009 年
- 註 49. 恩納村教育委員会『山田グスク』2013 年
- 註 50. 名護市教育委員会『宇茂佐古島遺跡』1992 年
- 註 51. 今帰仁村教育委員会『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』1991 年
- 註 52. 嵩元政秀「ヒニ城の調査報告」『琉球文化財調査報告』1966 年 琉球政府文化財保護委員会
- 註 53. 石垣市教育委員会『登野城遺跡』ホテル建設に伴う緊急発掘調査 2011 年
- 註 54. 勝連町教育委員会「浜中学校庭出土の人骨」『勝連町の遺跡』1979 年
- 註 55. 喜界町教育委員会「城久遺跡群・山田中西遺跡Ⅱ』2008 年
- 註 56. 有銘倫子「沖縄県内における遺跡出土硯」『南島考古』No.30 2001 年
- 註 57 a. 和田久徳・吹抜悠子・真喜志塔子・高瀬恭子「李朝実録の琉球国史料(訳註)(六)」『南島史学』第 44 号南島史学会 1994 年  
 b. 池谷望子・内田昌子・高瀬恭子『朝鮮王朝実録 琉球史量集成 訳注編』2005 年  
 c. 田川孝三『李朝貢納制の研究』1964 年 東洋文庫
- 註 58. 上原 静「沖縄諸島における中近世の鑄造技術と生産」『南島考古』No.28 2009 年
- 註 59. 河口雅之氏は註 35 文献において、鹿児島県本土との比較から薩南諸島(奄美)の特徴として指摘しているが、この組成は沖縄・先史諸島の状況ともほぼ同様であり、琉球列島全体に拡大してとらえられる。

## 参考文献 第 1・2 表の出土遺跡一覧表

〈奄美諸島〉

- 註 1. 笠利町教育委員会『マツノト遺跡』2006 年
- 註 2. 笠利町教育委員会『城遺跡・下山田遺跡・ケジⅢ遺跡』1986 年
- 註 3. 名瀬市教育委員会『小湊フワガネク遺跡群Ⅰ』2005 年
- 註 4 a. 喜界町教育委員会『城久遺跡群・山田中西遺跡Ⅰ』2006 年  
 b. 喜界町教育委員会『城久遺跡群・山田中西遺跡Ⅱ』2008 年

- 註 5. 喜界町教育委員会『城久遺跡群・山田半田遺跡一畑地帯総合整備事業城久地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』2009年
- 註 6. 喜界町教育委員会『城久遺跡群 前畑遺跡・小ハネ遺跡』2011年
- 註 7. 註 6 掲載文献と同じ  
(沖繩諸島)
- 註 1. 熊本大学「ナガラ原東貝塚 7」『考古学研究室報告』第 46 集 2011 年
- 註 2. 伊是名村教育委員会『伊是名元島遺跡』2000 年
- 註 3. 大宜味村教育委員会『大宜味村の遺跡一詳細分布調査報告書一』1984 年
- 註 4. 嵩元政秀〈鉄製品一覧表〉「グスクについての試論」『琉大史学』創刊号 1969 年
- 註 5 a. 今帰仁村教育委員会『今帰仁城跡発掘調査報告 I』1983 年  
b. 今帰仁村教育委員会『今帰仁城跡発掘調査報告 II』1991 年  
c. 今帰仁村教育委員会『今帰仁城跡発掘調査報告 III』2008 年  
d. 今帰仁教育委員会『今帰仁城跡発掘調査報告 IV』2009 年  
e. 今帰仁村教育委員会『今帰仁城跡発掘調査報告 VI』2013 年
- 註 6 a. 今帰仁村教育委員会『今帰仁城跡周辺遺跡 II』2005 年  
b. 今帰仁村教育委員会『今帰仁城跡周辺遺跡 III』2007 年
- 註 7. 名護市教育委員会『久志貝塚』緊急発掘調査概報 1980 年
- 註 8. 名護市教育委員会『宇茂佐古島遺跡』1999 年
- 註 9. 宜野座村教育委員会『漢那ウェーヌアタイ遺跡』1990 年
- 註 10. 大城慧「沖繩グスク時代鉄器・鉄滓出土地名表」『文化課紀要』第 6 号沖繩県教育庁文化課 1990 年
- 註 11 a. 沖繩県教育委員会『恩納村熱田貝塚発掘調査ニュース』1978 年  
b. 沖繩県教育委員会『熱田貝塚』1979 年
- 註 12 a. 恩納村教育委員会『山田グスク』1990 年  
b. 恩納村教育委員会『山田グスク』2013 年
- 註 13. 読谷村教育委員会『タシーモー北方遺跡』2001 年
- 註 14. 嘉手納町教育委員会『屋良グスク』1994 年
- 註 15. 沖繩県教育委員会『平敷屋トウバル遺跡』1996 年
- 註 16. 嵩元政秀〈鉄製品一覧表〉「グスクについての試論」『琉大史学』創刊号 1969 年
- 註 17. 勝連町教育委員会「浜中学校庭出土の人骨」『勝連町の遺跡』1979 年
- 註 18. うるま市教育委員会『具志川グスク I 一発掘調査報告概報一』2006 年
- 註 19. 註 10 文献掲載と同じ
- 註 20 a. 琉球政府文化財保護委員会『琉球文化財調査報告書』1965 年  
b. 琉球政府文化財保護委員会『琉球文化財調査報告書』1966 年

- c. 勝連町教育委員会『勝連城跡－昭和 56 年度本丸南側城壁修復に伴う遺構発掘調査報告』 1983 年
- d. 勝連町教育委員会『勝連城跡－南貝塚および二の丸北地点の発掘調査－』 1984 年
- e. 勝連町教育委員会『勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査 (1)』 1990 年
- f. 勝連町教育委員会『勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査 (2)』 1991 年
- 註 21. うるま市教育委員会『南風原古島遺跡』 2008 年
- 註 22. 嵩元政秀「グスクについての試論」『琉大史学』創刊号 1969 年
- 註 23. 当真嗣一「石川市伊波後原遺跡調査概報」『南島考古』第 4 号 1975 年
- 註 24. 沖縄市教育委員会『沖縄市の埋蔵文化財一遺跡分布調査報告書一』 1982 年
- 註 25. 沖縄市教育委員会『越来城』 1988 年
- 註 26. 北谷町教育委員会『北谷町の遺跡』 1994 年
- 註 27. 北谷町教育委員会『後兼久原遺跡一庁舎建設に係る文化財発掘調査報告喜一』 2003 年
- 註 28. 北谷町教育委員会『北谷町の遺跡』 1994 年
- 註 29. 北谷町教育委員会『伊礼原 B 遺跡・伊礼原 E 遺跡』 2008 年
- 註 30. 北谷町教育委員会『伊礼原 D 遺跡』 2008 年
- 註 31 a. 中城村教育委員会『中城城跡』 2002 年
  - b. 中城村教育委員会『中城村の文化財一遺跡分布調査報告書一』 1992 年
- 註 32. 中城村教育委員会『新垣グスク』 2007 年
- 註 33 a. 宜野湾市教育委員会『都市計画街路大謝名・真志喜線建設工事関係埋蔵文化財緊急発掘調査概要』
  - b. 真志喜富盛原第Ⅱ遺跡・真志喜藏当原遺跡 1998 年
- 註 34. 宜野湾市教育委員会「喜友名山川原第 6 遺跡の調査」『喜友名遺跡群』 1984 年
- 註 35. 宜野湾市教育委員会『宜野湾クシヌウタキ』 1997 年
- 註 36. 宜野湾市教育委員会「大山前門原第一遺跡」『市内埋蔵文化財発掘調査報告』 2010 年
- 註 37. 沖縄県教育委員会『牧港貝塚・真久原遺跡』 1985 年
- 註 38 a. 浦添市教育委員会『市内埋蔵文化財発掘調査報告書』 2010 年
  - b. 浦添市教育委員会『市内遺跡発掘調査報告書 (1) 平成 13~18 年度調査報告一』 2007 年
  - c. 浦添市教育委員会『浦添城跡発掘調査報告書』 1985 年
- 註 39. 沖縄県教育委員会『拝山遺跡』 1987 年
- 註 40. 浦添市教育委員会『浦添ようどれ (Ⅲ) －金属工房編－』 2007 年
- 註 41 a. 西原町教育委員会『我謝遺跡－個人住宅建設に伴う緊急発掘調査－』 1983 年
  - b. 西原町教育委員会『我謝遺跡－分譲宅地造成に係る緊急発掘調査－』 1983 年
- 註 42 a. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城－京の内跡発掘調査報告書 (Ⅱ) －』 2009 年
  - b. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城－書院・鎖之間地区発掘調査報告書一』 2005 年
- 註 43 a. 沖縄県立埋蔵文化財センター『真珠道跡－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書 (Ⅰ) －』

2006年

b. 沖縄県立埋蔵文化財センター『真珠遺跡―首里城跡真珠道地区発掘調査報告書(Ⅱ)―』

2007年

註44 a. 那覇市教育委員会『銘苅原遺跡』1997年

b. 那覇市教育委員会『銘苅原遺跡―天久公園整備事業に伴う緊急発掘調査Ⅰ―』2002年

註45. 那覇市教育委員会『銘苅原南遺跡』2002年

註46 a. 那覇市教育委員会『天界寺跡―首里城線街路事業に伴う緊急発掘調査報告―』1999年

b. 那覇市教育委員会『天界寺跡―首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査―』2000年

註47. 豊見城村教育委員会『高嶺古島遺跡』1990年

註48. 豊見城村教育委員会『豊見城の遺跡』1988年

註49. 豊見城村教育委員会『伊良波東遺跡』1987年

註50 a. 南風原町教育委員会『クニンドー遺跡―第1・2・3次発掘調査報告書―』1996年

b. 南風原町教育委員会『クニンドー遺跡(Ⅱ)』2005年

註51. 南風原町教育委員会『南風原町の遺跡―町内遺跡発掘(詳細分布)調査報告書―』1993年

註52. 大里村教育委員会『大里城跡―都市公園計画に係わる緊急確認発掘調査報告書(1)―』1998年

註53 a. 琉球大学考古学研究会『稲福村落遺跡』1971年

b. 沖縄県教育委員会『稲福遺跡発掘調査報告書(上御願地区)』1983年

註54. 吉岡康暢・門上秀叡『琉球出土陶磁器社会史研究』2011年

註55 a. 玉城村教育委員会『糸数城跡―発掘調査報告書Ⅰ―』1991年

b. 嵩元政秀〈鉄製品一覧表〉「グスクについての試論」『琉大史学』創刊号1969年

註56. 八重瀬町教育委員会『世名城古島遺跡』2008年

註57. 註10 掲載文献に同じ。

註58. 註10 掲載文献に同じ。

註59. 糸満市教育委員会「佐慶グスク」『佐慶グスク・山城古島遺跡』1994年

註60. 玉城村教育委員会『玉城村の遺跡』1995年

註61. 沖縄県教育委員会『阿波根古島遺跡』1990年

註62. 友寄英一郎・嵩元政秀「フェンサ城貝塚調査概報」『琉球大学法文学部紀要社会編』13 1969年  
〈宮古諸島〉

註1. 平良市教育委員会『住屋遺跡』1992年

註2. 沖縄県教育委員会『宮国元島』1980年

註3. 城辺町教育委員会『砂川元島遺跡』1989年

註4. 沖縄県教育委員会「オイオキ原遺跡」『ぐすくーグスク分布調査報告(Ⅱ)宮古諸島―』1990年  
〈八重山諸島〉

- 註 1. 仲筋貝塚発掘調査団『仲筋貝塚』1981年
- 註 2 a. 青山学院大学『ヤマバレー遺跡発掘調査概報』1977年  
b. 青山学院大学『ヤマバレー遺跡第2次発掘調査概報』1980年
- 註 3. 沖縄県教育委員会『カンドウ原遺跡』1984年
- 註 4. 沖縄県教育委員会『八重山石垣市平得仲本御嶽遺跡発掘調査報告』1976年
- 註 5. 石垣市教育委員会『登野城遺跡』ホテル建設に伴う緊急発掘調査 2011年
- 註 6. 石垣市教育委員会『山原貝塚発掘調査概要』1983年
- 註 7. 琉球政府文化財保護委員会「八重山鳩間島中森貝塚発掘概報」『文化財要覧』1959年
- 註 8. 沖縄県教育委員会『竹富町・与那国町の遺跡』1980年
- 註 9. 沖縄県教育委員会『上村遺跡』1991年
- 註 10. 与那良遺跡発掘調査団『与那良遺跡』1982年
- 註 11. 与那国町教育委員会『与那原遺跡』1988年

## Knives Excavated from the Ryukyu Islands

Shizuka UEHARA

We examined the historical implications of iron knives excavated from remains in the Ryukyu Islands from the end of the prehistoric period to the Gusuku period.

The examined materials are 234 artifacts excavated from 85 remains. Our analysis revealed the following: (1) Iron knives appeared in the Ryukyu Islands in the prehistoric period, during the 5th-7th centuries, and started to be produced there during the 8th-11th centuries. They increased significantly in number during the 14th-16th centuries in the Gusuku period, while their distribution, which was centered in the Okinawa Islands, expanded widely to the Miyako and Yaeyama Islands. Contrarily, however, their distribution became dispersed in the Amami Islands during the same period; (2) In mainland Okinawa, each of the three regions—the north, middle and south—has a center of distribution. As a whole, the middle region shows the densest distribution; (3) The remains where these knives were found are classified into shell mounds, gusuku settlements, sites of production, and others. It is noteworthy that these knives are found also at gusuku and settlements where no obvious arms and weapons are found, suggesting commonness in their usage and functions; (4) The knives are classified into two types: type I for general use, and type II for shaving. The type I knives have a shape that has existed since the end of the prehistoric period. The type II knives appear only in the end of the later prehistoric period (the 8th-11th centuries) and only locally. Their subsequent development has not been elucidated to date; (5) The genealogies of both type I and type II knives can be traced back to those in Kyushu. However, all of the type I knives are of general use or of similar types and have no relevance to metal knives produced in the Kofun period. On the other hand, the type II knives for shaving show affinities with metal knives in the Kofun period in terms of manufacturing technology; (6) During the 5th-7th centuries in the prehistoric period, knives with *machi* (notches at the start of the blade) are observed. They are presumed to have been brought over by ship, considering the set of other artifacts found at all the remains. During the 8th-11th centuries, short, small knives with a wide blade and no *machi* or those with only shallow *machi* appear. Knives of this form account for an absolute majority or 72 percent of those excavated from the remains in this period. This is regarded as a change of manufacturing technology, a diversification from simple single-edged knives to those with elaborate workmanship; (7) Including knives, the custom of burial accessories is not common in the society of the Ryukyu Islands; (8) The knives are presumed to have been carried, considering relevant tools such as portable grinders and

tweezer-shaped metal tools, as well as cases of burial accessories; (9) When they first appeared, the knives had the nature of a precious tool of convenience. They began to assume the nature of a weapon in tandem with battle weapons, which increased in the second half of the Gusuku period. Their nature as a tool can be observed in the examples of the type II knives. It is noted that an attribute as a religious tool or a tool to ward off evil spirits cannot be observed among the cases of burial accessories in the Ryukyu Islands. Active use of the knives as items worn ready to hand seems to have started in the period of the Ryukyu Kingdom. Examples of their function (natures) as a ritual weapon are found in old documents; (10) In the Ryukyu Islands, the transition of tool materials to iron took place mainly in battle arms, weapons and knives, with very few examples observed among production tools for agriculture and fishery in terms of both variation and quantity. This, along with the fact that these tools were not included in burial accessories (to be abandoned), is considered to reflect economic and social situations in the Ryukyu Islands.